



No.151



「だれか」のことじゃない「わたし」のこととして

「だれか」じゃない「わたし」

市橋小 六年 福井 那菜

自分がかんげいなかつたら
その子は悲しい思いをしてもいいの？

自分がかんげいなかつたら
それを見過ごしてもいいの？

見て見ぬふりをされるのは

とつてもつらいこと

だれかに助けてほしいんだよ

助けてくれるって

信じてるんだよ

今 その子に
手をさしのべることができるのは

「だれか」

じゃない

「わたし」

じゃない

「わたし」

わたしができること

こころのサインに気付いたら

「だれか」

じゃない

「わたし」

じゃない

それがわたしにできること

「だれか」

じゃない

「わたし」

じゃない

「わたし」が 一歩を踏み出すの



上の作品は、昨年度、人権に関する「詩と標語」の優秀作品です。毎年、応募してくれる多くの子どもたちの作品から、私たち大人こそが学ぶべき切実な思いや考え方、行動などが心の叫びとして示されているような気がしてなりません。

福井さんの作品には、「わたし」の目の前で「なにか」が起こった時には、「だれか」じゃない「わたし」が勇気を出して一歩を踏み出すという前向きな気持ちが溢れています。福井さんの目の前で悲しい思いをしている子がいたり、辛くてじっと我慢している子がいたりしたら、声を上げて、一歩を踏み出そうとする福井さんの姿が目につかびます。

そして、「わたし」の目の前で起こっていることとは何でしょうか？

あつてはならないこと、許してはいけないこと、「いじめ」だと考えられます。現在、どの学校でも「いじめ」は起こる可能性があります。もしかしたら、いじめの根絶は難しいかもしれません。しかし、いじめを克服していこうとする姿勢は、子どもたちだけでなく、私たち大人も常に持ち続けていかなければなりません。そんな気持ちに改めて気付かせてくれた福井さんの詩に感謝するとともに、新たな決意が芽吹いてくるようです。

また、そんな場面に遭遇することは、学校だけでなく私たちが生活している様々な場面で起こり得ることが考えられます。今では、「〇〇ハラ」などと呼ばれています。「ハラ」とは「**ハラメント**」＝「相手に迷惑をかけること、嫌がらせ、いじめ」のことで、年々その数は増えています。

では、私たちは福井さんのいう、「見て見ぬふりをしない」ようにするためには、どうしたらいいのでしょうか。



岐阜市・岐阜市教育委員会